

二〇一四年度 卒業論文

真宗移民の研究

コピ—廠禁

L  
1  
1  
0  
1  
2  
9  
湯澤義晋

目次

序論	1
本論	2
第一章 東北真宗移民の動向	2
第一節 移民での経路（地図）	2
第二節 東北への移民の規模	5
第二章 東北真宗移民の背景	9
第一節 近世後期における東北地方	9
第二節 東北への移民の導入とその背景	11
第一項 久米泰翁について	11
第二項 間引き政策と真宗	13
第三章 東北真宗移民と浄土真宗	15
第一節 近世後期の東北宗教事情	15
第二節 宗教の違いによる摩擦	18
結論	22

Copyright © 2011 禁书网

註  
参考文献  
参考史料

# コピ—嚴禁

## 序論

本卒論においては、とくに相馬中村藩（現在の福島県浜通り北部）の真宗移民の研究について考察する。真宗移民とは、江戸後期から明治中期にかけて真宗門徒が人口減少地域に移住したものをいう。経済が活発となる傾向がみられるが、その原因について考えたい。寺請制度のもと他国への移住は幕府や藩により禁止されており、非合法の活動であった。そのため、残された史料は少なく、本論においてもその少ない資料をたよりに考察し、主題を探りたい。ただ、この移住の動きこそ、東北における真宗のルーツであると考えられ、私が生まれ育ち、父が住職を務める寺院の起源に関心があるため、研究の主題とした。また、私の寺院（福島県南相馬市・勝縁寺）もこの文化三年（一八〇六）において建立された寺院であり、なんらかの影響があると考えられる。よって、本研究を通して、東北真宗史の一端について明らかにするとともに、自身の寺院のルーツに迫りたい。

移民と東北真宗の関係に関する先行研究がある。中でも、岩本由輝氏が多くの論稿を発表している。岩本由輝氏、政治経済史分野の立場であるが、この研究が相馬地域に詳細なため、まずこれらの研究、ならびに地域史を参考にし、第一章と第二章において当時の移民の歴史とその背景について検討を行う。そして第三章において、従来あまり注目されてこなかった真宗信仰との関係について考察する。

第一章 東北真宗移民の動向

第一節 移民での経路（地図）

まず史料一（史料一参照）は移住者達が通った道筋を記したものである。史料一で北陸から東北へと行くにあたり、日本海側を使っていることが分かる。その理由として、一つは関東側を通るとなると人が多いため目立つこと、次に関所の数によるものだと考察する。だが関東への移住をする者達は日本海側を通らず、現在の岐阜、長野、山梨を経緯し関東への移住を行っている。北陸から相馬中村藩へと向かうとなれば加賀から境関所（富山県朝日町・新潟県糸魚川市）を通ることになる。そうなれば移住する者たちは手形をみせ関所を通ることになる。だが、当時手形を持つ者は少なく関所を合法的に通ることが出来なかったと考える。その理由として図説相馬・双葉の歴史にこのようなものがある。

御旧跡廿四輩御判帳ならびに往来手形（相馬市・前山貞男氏蔵）。浄土真宗門徒が相馬の地に移住するときに、北関東の親鸞廿四輩遺蹟寺院巡拝の旅を装いながら来たという。その時のいわば集印帳で、主人は「越中国砺波群大塚村 長次郎」という農民である。移住についてはさまざまな方法があり、いわゆる「非合法移民」なので苦労があったといわれる。<sup>1</sup>

この集印帳により少数ながらも手形を持ち関所を通った者がいたことが分かる。だが巡拝の旅とは書いてあるが、移住のため相馬中村藩へと移動するためのものである。移住は非合法に行われていた政策であり、関所を通る明確な理由がないためこのような手段を取っていたのであると考察する。

次に陸路と海路で使われた道について考察していく。陸路に関しては山道、獣道を通ったのだと考えられる。それも夜間か雨、風が強い時である。何故夜間などに移動したかだが、夜間であればまず人目につかず山道に入ることが出来るからであり、雨などの時も同様である。人目につかず関所を超え、相馬中村藩へとたどり着くことが彼らの一番の目的であったからだと考える。北萱浜史にも同じように書かれている。

国外転住法度の時世に一家族を引き連れて藩境を抜け出すことは容易なことではなかったであろう。ひそかに日時を前ぶれておいて、夜にまぎれ国境を抜け出し、昼は山に隠れ、夜歩きをするなど、いろいろなことがあった。一番困ったのは、赤ん坊で、所かまわず泣き出すので、乳房で口を押えながら通った。おむつを乾かすのに、すげ笠の上に干しながら歩いた。子供をボデに入れて天秤で担いで来た。<sup>2</sup>

陸路による移動ではやはり人に見つかる可能性が高いため、夜に移動をしていたことが分かる。次に移動に使われた道筋だが、それは池端大二氏の調べによりある程度絞られている。

相馬 加賀―福野―入善―愛本橋―親不知―柏崎―小千谷―六十里越―会津柳津―会津若松―福島―相

馬

このコースのほかに文通や訪ねた方の三人方が五箇山の名前を上げられ、五箇山―中山道―関東へのコース

があつたことを知つた。<sup>3</sup>

池端大二氏の調べにより陸路において使われた道が分かる。富山から境関所を抜け、新潟を經由し福島の会津地方に入り、そこから中通りを抜け浜通りにある相馬中村藩へと向かつた。

次に海路について考察していく。海路は富山などから行くのであれば日本海を使う以外に他にない。海路では陸路ほどの苦労はなかつたと考える。その理由として海路であるならまず人目につかないということが言える。沖の方を移動するのであればまず追われることはない。他にも漁業などの人に紛れることも出来るからである。だが、海路も陸路どうように問題がある。それは天候である。陸路の場合は風が強い時、暗い時でも大丈夫だが海路ではそれが問題である。船に乗り天候が荒れた場合はよくて座礁、悪くて遭難、沈没のリスクがある。そのため海路での移動は季節によって限られたであろう。海路で使われた道筋も池端大二氏の調べによりある程度分かつている。

相馬 船で佐渡ヶ島を目印として柏崎から新潟の間に上陸―六十里越、または東蒲原―会津―福島・郡山・白河の道―相馬方面<sup>4</sup>

海路でも新潟を目指し福島へと入っている、福島へと移動するには新潟経由が多く使われていることが分かる。最後に陸路と海路での移動ではどちらが多く使われていたかについて考える。陸路では監視の目、子供の泣き声などの問題がある。海路では天候の問題により時期が限られてしまう問題がある。だが安全面で言えば海路からの移動が安全だと考える。陸路ではやはり関所などで人に見つかつてしまふ可能性が海路より大幅に上がつてし

まい、安全性がない。海路は時期、天候に左右されるが陸路ほど人に見つかり捕まってしまうなどの危険性は低いと考える。人に見つかりやすい陸路か、天候などに左右されてしまうが、人に見つかりにくい海路であればまず海路を選ぶであろう。海路が多かったという明確な資料はまだ見つかっていないが竹内慎一郎氏、岩崎敏夫氏、池端大二氏の三人もこのように書いている。

加賀農民の走り人は陸路で境関所を越える数より海路によるものが多かったと言われる。境関所は海陸ともに監視の目が厳しかった。海路で加賀領を抜け越後に入った。越後に入ってしまったえば大手を振って北関東、東北に行けた。<sup>5</sup>

これにより陸路より海路を多く使っていたことが分かる。関所を足で越えることはやはり危険であり、少しでも安全な海路が好まれたのであることが分かる。

相馬中村藩に移住した者が大多数だが、会津の地方にも北陸からの移住した者がいる。これは縁がありそのままその地に定住した者達である。

## 第二節 東北への移民の規模

移住の際に何人の人が相馬中村藩へと移住したかについて考察する。考察するに当たり、他藩への移住は藩に認めてはられない政策の他、移民政策とは無関係のない者が多数移住してきているため、確かな人数を書いている資料がないことを踏まえ考察していく。



最初に相馬中村藩の人口が一番減少していた時の人数から考察していきたい。

天明凶作による人口を一瞥すれば、天明七年は人口三万二千二百四十七人で、人口の最も減少した時であり<sup>6</sup>。

天明七年時では相馬中村藩の人口は飢饉により三万二千二百四十七人となっている。<sup>7</sup>

次に文久二年字での相馬中村藩の人口を見る。

文久二年（一八六一）には戸数八、四九四戸、人口五二、六〇〇人余にまで回復した。<sup>8</sup>

天明七年から文久二年の七五年間の間に人口は二〇三五三人の増加がみられる。この七五年間で増えた人口の大多数が真宗移民の政策によって北陸から移住してきた真宗門徒なのである。大多数と書いているが、移民政策とは別に無関係の者も移住してきているので全部ではない。他にもこの政策により人口増加で藩の財政も回復し、元々住んでいた者達の生活も楽になり、人口が徐々に増えていったのだと考えられる。

次に移民政策を、最初の移民、第一次移民、第二次移民の三つの時期に分け、移民での人口増加について考察していく。

林能の相馬入りに際して、三〇歳になる六朗兵衛（法名釋順證）という門徒が、一三戸、七九人の人々を勧誘してともに相馬にわたりました。（「正西寺過去帳」）。喜んだ久米泰翁は林能を藩の師範所万年山長松寺で学ばせ、闡教は彼を養子にして東福庵に住ませました。この七九人が相馬移民第一号とされ、正西寺や原町別院では林能と六朗兵衛らが移住した文化八年（一八一）をもつて移民元年と定めています。ただしこれだけの人数が集団で移動したとはとても考えられず、人目を避けて少数ずつ時間をかけて移住したはずで

す。<sup>9</sup>

最初の移民として呼ばれた七九名は少しずつ来たと言われている。ここで考えられるのは、その少数とは大体四人から五人の二、三家族で来ていたと考えられる。全員がバラバラの出生の者であれば、移住に成功した際に連携がとれない可能性があるからである。移住先にてのトラブルを少しでも減らすためには、家族での移住が心身ともに住み始めてからも楽でいられるからと考える。移住が第一と思われるが、移民政策では移住したその後が重要であると考ええる。

次に第一次移民について考察する。

相馬藩で報徳仕法がはじまる弘化二年（一八四五）までを第一次移民の時代とします。第一次移民における新百姓は八、九四二人、戸数にして一、九七四軒を数え、一六、六八二石の水田、一四、六八四石の畑地を開きました。また三十万両あった藩の借金も少しずつ返済が進みました。<sup>10</sup>

この第一次移民は最初の移民の一八一一年からの三十四年間の結果である。三四年間で七九名から約九〇〇〇名まで移住する者が増えたのは、移民政策が軌道に乗ったと考えることが出来る。だが、この三四年の間にはもう一度飢饉が起こっている。一八三三年の天保の大飢饉である。この飢饉にて相馬中村藩での犠牲者はほぼ無いに等しい結果が出ている。

しかし天保四年（一八三三）にまた飢饉があり、移民門徒による生産向上で備蓄米を確保していたので犠牲者を出すことは免れたものの、財政復興計画は足踏みするようになりました。<sup>11</sup>

財政面では被害が出ているが、犠牲者があまり出ていないのは天明の飢饉と比べると移民政策により藩の財政は戻りつつあったことが分かる。

最後に第二次移民について考察する。第二次移民は弘化二年の一八四五年から、一八七一年の明治四年までの二六年間のことである。第二次移民が何故明治四年で終わっているかだが、明治四年に明治新政府から政策がでたためである。

明治政府が幕府時代の政策は全て廃止するという方針をとったため、残念ながら途中で中止となりました。

12

この明治新政府の政策により移民政策は幕を閉じたことになる。だが、移民政策により相馬中村藩の人口、財政が回復したことは明らかである。第二次移民では正確な人口増加数が分からないため、戸数の増加量からおおまかな人口増加数を、当時の一戸当たりに住む家族の平均人数から調べる。

そして一戸当り人口五・六七五人、労働人口（一八歳―六〇歳）は平均二・七人である。これは現在の同地方の平均から見ても、労働人口は甚しく低く、畑面積は著しく少ないが、水田はほぼ水準に達していたことが知られる。<sup>13</sup>

堀一郎氏の調べにより一戸当たりの人数は五〜七人だと分かる。次に明治四年までの二六年間に増加した戸数を調べる。

移民についていえば、文化十年（一八一三）より弘化二年（一八四五）までの「文化の御厳法」時代三十二

年間に約一、八〇〇戸、さらに明治四年（一八七二）までの「報徳仕法」時代を加えた五十八年間に約三、〇〇〇戸という推定もなされています。<sup>14</sup>

五八年間で三〇〇〇戸の増加、三二年間では一二〇〇戸の増加なので、二十六年間での増加は一八〇〇戸である。そうすると、一戸当たりの家族が五人から七人なので約一〇〇〇〇人増加したことがこれにより分かる。

真宗移民を最初の移民、第一次移民、第二次移民の3つに分けてみると徐々に移民の規模が大きくなっていったことが分かる。これは相馬中村藩が移住者と呼んだから増えていったのだが、故郷を離れ、自ら移住したいと考えていた人達も少なからずいたと考えられる。最初の移民では不安があったであろうが、第一次、第二次移民の時には既に最初に移住した者達の待遇や生活内容を聞けるため、それに便乗し新天地を求め移住した者も多いと考える。

## 第二章 東北真宗移民の背景

### 第一節 近世後期における東北地方

当該時期は、江戸四大飢饉の一つである天明の大飢饉により、本研究の対象である相馬中村藩においても多大な被害があったと考えられる。竹内慎一郎氏は天明の大飢饉の東北への影響を次のように指摘する。

天明二年から七年（一、七八二〜八六）に及ぶ前後五年間、冷害・長雨・洪水・地震・浅間山の大噴火による降灰などのため凶作が続き、特に三年（一七八三年）には洪水・噴火・冷気のため大凶作となり、多数の餓死者を出した。<sup>15</sup>

竹内慎一郎氏の指摘は、主に奥羽地方南部や仙台に対しての指摘であるが、中村藩においても同様のことがいえる。それは次の岩崎敏夫氏からも窺える。

相馬藩（相馬中村藩・筆者注）では、天明の凶作により戸口減じ、土地荒廢し、収納米が減じたこと（共に約三分の一に減る）年々借財で暮らすようになったこと。いま試みに、天明凶作による人口を一瞥すれば、

天明七年は人口三万二千二百四十七人で、人口の最も減少した時であり、これを前述の最も多かった元禄十五年に比較すれば、五万七千二百五十八人の減少で、割合にすれば六割三分九厘の減少に当たる。<sup>16</sup>

上記の見解を窺がうと、中村藩では元禄十五年（一七〇二）に比較して、天明七年（一七八七）では五万人以上の人口減少が見られる。その結果数千軒の空き家や、使われなくなった田畑が多くあらわれた。

またこの飢饉によって被害をうけた農家は子供の養育もままならず、子供を殺す行為や墮胎などが頻繁に行われたという。それは太田浩史も次のように述べている。

間引きというのは、一姫二太郎として男は二人、女は一人しか取り上げませんから、女の子が優先的に間引きされます。ですから女性の人口がどんどん減っていくんです。だからもうひどい時になると、女の子が生まれたら文句なしに間引けと、村の掟で決まっていた。そうしますと当然こういうおかしな人口構成になる。

女の子にとっては本当に地獄のような世界が、当時の関東の状況だったんです。<sup>17</sup>

飢饉で人が多く亡くなるとともに、子供の減少はそのまま人口減少へとつながったと考える。と同時に、相馬中村藩においては借金が膨れ上がる。このような結果、他藩からの移住政策が取られた。

## 第二節 東北への移民の導入とその背景

### 第一項 久米泰翁について

以上の状況を打破するために立ち上がったのが、久米泰扇（一七七六？）であった。そこでまず、久米について確認する。そして、その政策について見ていくとともに、真宗との関係について述べていきたい

ここで久米泰翁という人物について確認をしておきたい。久米泰翁については相馬市史三において書かれており、長文ではあるが久米という人物について紹介する。

久米泰翁は安永五年（一七七六）に生まれ寛政三年（一七九一）に父の後を継ぎ、文化三年（一八〇六）に家老職の代頭になる。当時の中村藩は天明の飢饉後人口減少して、荒地が多く、藩主樹胤もその回復にあたるが達成が出来なかった。文化十年（一八一三）に久米は家老を辞め、自らが移住の先導をとった。久米は移住を行うに当たり宗教の力によるものが良好と考え、たまたま来ていた真宗の僧と話をつけ、北陸からの真宗移民を図った。北陸から帰った僧は四人を連れてき、久米は居宅農具食料一切を支給して開墾にあたら

本禁

せた。その成果が良好であったため、親戚知人に知らせ、暫くの間移住者が増加するにあたった。増加する中で久米は自分の邸内に移民者用の施設を設けた。それも三年から四年たつと移民者も五十余戸にまで増えた。また八幡山正西寺を建て、移民者の信仰のよりどころも出来たのだ。<sup>18</sup>

これが久米泰翁という人物である。久米の行ったことの中で一番に取り上げるのならば、藩のために率先し他藩からの移住計画を行ったことである。他藩からの移住ともなれば藩同士での話し合いによって決まることだが、久米が移住者を集めるために行ったやり方をみると、とても変わっている。たまたま来ていた真宗の僧に話をつけと書かれているが、従来であれば藩が教団に頼み僧へと話が伝わり、僧が動くという形である。久米の場合は藩から教団ではなく個人から個人への頼みで移住者を募ったのである。その僧が移住者を連れ久米の元に戻ると、これが「非法法移民」の始まりである。第一章にて述べているが、関所を無断で超えて来ているため、合法ではなく非法法なのである。

次に久米について考えるならば、久米が浄土真宗という宗教をどこまで知っていたかである。久米は移住際には宗教による力が良好と考え、真宗門徒を北陸から呼んでいる。当時東北地方には浄土真宗があまり伝わっておらず、信仰の内容もあまり知ってはいなかったと考える。知ろうとするならば、布教に来ていた僧に直接聞くか口伝えて聞いていたかである。そこで久米が目付けたのが浄土真宗大谷派西念寺の良水である。

一人浄土真宗大谷派西念寺良水は教化のみでは効果は薄いと、信仰上、間引きを否定する北陸の浄土真宗信徒を移民として導入し、欠落農民の後を再開発することが人口増加の早道であると建言、北陸は関東とは

逆に人口過剰で土地が不足し農民は窮乏していることを北陸勸化の折に知ったという<sup>19</sup>。

良水は久米よりも早くに真宗門徒での人口増加に目をつけていたのである。久米は良水の政策に目をつけ、これをモデルとして、真宗門徒での人口増加が藩の財政難の救済の早道と考え、北陸からの真宗門徒の移住の政策をとったと考える。

## 第二項 間引き政策と真宗

飢饉により多くの人々が亡くなった。餓死によるものが大多数であるがその他に間引きなども行われていたようだ。間引きが行われるということは、次世代の子が減少することである。次の世代の子たちがいないとなれば、その地域に待っているのは労働力の低下と、人の手が加えられない荒れた地だけである。これにより藩の借金が増えるだけである。竹内慎一郎氏の調べで間引きをする者に対しての藩の政策についてこう指摘している

天明の人口減少を回復するために三男二女以上の子持ちには養育料を出したり、間引き（ダタイ）を取り締まったりしたが、三割にも激減した住民はなかなか元の様にはならなかった。藩の人口対策として最後に考えられたものが他藩よりの移民であったのである。<sup>20</sup>

移住者を呼ぶ前に藩から養育費を出すなどの政策をとっていたようだが、それは元の様に戻ることは出来ず悩んだ末の移民だったのだ。第一項の久米の説明で述べたように、久米が移民者を呼ぶことを率先して行いそれに成功している。そもそも移民はたまたま布教のため来藩していた浄土真宗の僧に頼んだが、当時の真宗門徒の殺



生忌避の考えが重要だと私は考える。千秋謙治氏も取り上げていた有元説がある。

近世の真宗地帯では、真宗の教義に基づいて殺生忌避が旨とされ、間引きなどという人口調節という慣習は認知されなかったとい有元正雄説(有元正雄『宗教社会史の構想・真宗門徒の信仰と生活』吉川弘文館、1997)がある。この有元説は、真宗の信仰から導きかれた殺生忌避などの教えが真宗門徒独自の信仰倫理↓エートス(道徳)を生み、真宗地帯のメルクマーク(目印、指標)としての殺生禁断⇨人口増加、勤勉⇨重労働従業者数。<sup>21</sup>

移民を募ったところで墮胎、間引きを繰り返すようでは今までと同じであり藩の財政、人口が戻ることはない。そこで殺生を忌避する真宗門徒が適任であると久米は考え、選んだのではないだろうか。墮胎、間引きをせずに勤勉であればまず失敗することはない。これが真宗門徒を選んだ理由であることが分かる。移民者達は有元説で言われているように、勤勉であり仕事熱心であったことが分かる。藩の財政が回復していったことからもうかがる。だが、勤勉であるから受け入れられていたわけではない。家族で移民してきた者がいたとして、成人を迎えた男性が配偶者を探すとどうなるだろうか。移民先の者を配偶者にすればいいのだろうか、移民先の者達は移民で来た者達を差別の対象として娘を嫁には出さなかったのだ。それについて池端大二氏も次のように書いている。

天明の飢饉では、青森、秋田、岩手県が最もひどかった。岩手県の農民は仙台藩へ逃げ込んだ。その農民たちは女を売り食物に換えた。生きるために仕方がなかった。女を買い入れた商人は都へ娘たちを売りに、相

馬藩を通った。相馬藩はそれを黙って見ていなかった。北陸より入り百姓政策をはかったが、地元の娘たちは、余所者を軽蔑して結婚はしない。移民して百姓とはなったものの、家庭がもてない。それ故折角得た土地を捨てていく者も少なからずいた。相馬藩は金を出して娘を買い集め、入り百姓の嫁にあてがった。自作農を創設するために、とことんまで移民の面倒を見た。世間では相馬藩を“人買いだ”と言った。女が足りなかったから仕方なくしたことです。<sup>22</sup>

飢饉により人身売買が行われていたが、社会状況からは当然であり、生きるための方途だったのであろう。人買いなどが飢饉の背景に必ずというほど出てくるのは歴史ではよくあるようだ。売春と飢饉と重税は相関関係であるといえる。だが、それにより移民者達は家庭を持つことが出来るようになった。家庭を持つことによる人口増加、農作業の効率化などがみられた。

### 第三章 東北真宗移民と浄土真宗

#### 第一節 近世後期の東北宗教事情

移住者達が真宗門徒であるなら、彼等は浄土真宗を信仰していただろう。彼等は「百姓」として呼ばれ田畑などを耕すのに懸命であったが、それを精神的に支えていたのが浄土真宗の信仰だったのだ。移民した当初は貧し

いものであったが、必ず仏壇を作り阿弥陀如来の仏像を安置していた。その仏像は様々であり、移民を決意し出るときに家族から譲りうけた物もあれば、新しく作ってもらい持っていく者いた。持っていくにあたり距離があるので大きな仏壇を持っていく者は多くはいなかった。代わりに懐中本尊を持っていく者が多かった。

ここで私が調査をして移住者達が持ってきたという阿弥陀如来の本尊が二点見つかった。

史料二（史料二参照）は高さ三〇cmの大きさの本尊である。観音開きで出来ており、懐に入る大きさであった。いわゆる懐中本尊である。これは持ち運びの便を考え作ってもらったものであると考える。次に史料三（史料三参照）は、本尊の高さが九cmのものである。これも観音開きで出来ており、箱の大きさを抜けば四・五cmの小ささであった。これもやはり、この大きさの物であるのは、史料二のように移動する時に便利であるからだろう。故郷を捨て、新天地を求める者達は新天地でどのようなことが待っているか分からず不安があったと考える。その支えになったのがやはり浄土真宗の教えだったのだ。何をするにもまず、信仰が優先されていたのだ。岩崎氏の調べによるものだが、このようなことが真宗門徒の間で行われていた。

宗教的影響は向かうのをそのまま受けているかと思われる。移民にとって信仰はほとんど絶対的なもので、尊崇すべきものは如来様だけであった。加賀の移民のかたまっているといわれる相馬市の在の宿千木（しゆくせんぎ）あたりでは、夕方通るとあちこちの家から御経の声や鉦の音が聞こえてくる。誰でも読経し、知らぬを恥としている。門徒が門徒の家を訪ねると、先ず上座を向いて如来を拝し、次に主人に挨拶をする。辞去する時も同様である。真宗的生活が常になされているのである。<sup>23</sup>

移住者達の心には真宗の信仰が優先してあったことがこれからも分かる。では、それは真宗のどのような点に基づくのか。調査にて福島県南相馬市にある勝縁寺の門徒である佐藤昌芳氏から当時の移住者の環境、立場を聞くことが出来た。以下にその記録を記す。

私達の先祖は隠れて来たため最初はあまり物を持ってきていなかった、だからお寺に行つて経を読む事、仏壇の前に座り経を読む事と田畑を耕す事しかしていなかった。けど経を読むのは一日も忘れなかったらしい。辛い時などは特に読んだらしい。泣きながら読んで馬鹿にもされ、泣きながら読経している姿を加賀泣きとも言われている。だから私達のご先祖様の苦勞を決して忘れない、この地はご先祖様が頑張つて耕した地だから絶対に離れられない。原発の事もあるけどこれだけは忘れてはいけない。最後に祖父達からよく言い聞かされていた言葉がある。その言葉は、念仏者は無碍の一道なり。という言葉である。私は内容はまだ詳しく意味はしらないが、とても大事な言葉であつたらしい。(史料四参照)

佐藤氏の話から彼等は念仏を重要視しており、念仏者は無碍の一道なり、という言葉を大切にしていたことがわかる。では、念仏者は無碍の一道なりを考察するにあたって、『歎異抄』第七条に書かかれる一節の原文を載せる。

念仏者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障礙することなし。魔界・外道も障礙することなし。罪悪も業報を感ずることあたわず、諸善も及ぶことなきゆえに、無碍の一道なり、と云々。<sup>24</sup>

この第七条の意は一般では、阿弥陀如来に救われた人は一切がさわりとならない無碍の一道の世界に出る。何故なら、阿弥陀如来から真実の信心を受けた者は天地の神も敬って頭を下げ、魔の世界の者真理に外れた道のものもさまたげることが出来ないのである。このように認識されている。

第七条に書かれている魔界・外道も障碍することなしについて考えると、宗教の違いにより移民先の者達が差別をしている環境が第七条での教えと立場が似ているため、移民者達は『歎異抄』第七条を重要視していたのだと考える。よって岩崎氏や佐藤氏が述べていたように、移住者たちが念仏を大切にしていた理由がわかる。彼らは差別などの辛い環境であろうと、無碍の一道を目指し日々を念仏と共に生きたのである。

## 第二節 宗教の違いによる摩擦

第一節で述べたように、移住してきた者は浄土真の宗門徒であるため、当たり前前に浄土真宗を信仰している。だが浄土真宗とは後からきた宗教であり、最初から信仰されていた宗教との間で摩擦がおきてしまう。当時東北の地方で信仰されていた宗教を堀一郎氏は次のように述べている。

元来、相馬藩は、真言宗、禅宗寺院が多く、また修験や巫女の活動も盛んであったが、浄土真宗にとっては未開拓の地方であった。<sup>25</sup>

移住してきた者達は最初からその地域で信仰されていた宗教に従うのではなく、一貫して浄土真宗を信仰し続けた。これが移住先の者達にとっては移住者達を差別する対象へと変えたのである。その原因について千秋謙治

氏はこう指摘している。

それには、相互の信仰の相違は大きく、移民の集落からは朝夕に、お経の声が聞こえ、老人は、殆どお経を暗誦していた。相馬はもともと土葬で火葬ではなかった。そこに移民が火葬の風習を持ち込んだ。土葬の霊魂観のある所に、人体を焼くという残酷さを持つ真宗門徒は汚れた人種の如く感じられたという。

移民は正月に門松を立てない。神棚設けず、氏神様もない。雷神様もなく、いつでも田植えをする。友引にも葬式をする。譜請をする時、金神も構わず、方角にもとられず、正月神も迷信として信じなかった。

ここで一番の問題になったのが葬送儀礼だと考える。東北地方では土葬での葬儀が当たり前であり、それ以外の儀礼はありえない。そこに浄土真宗での火葬の風習がきたため、人を焼く行為が特に残酷にみえてしまったのだと考える。浄土真宗の門徒は自分達が信仰している宗教の儀礼で行ったが、それが差別の原因となるとは思ってはいなかったと考える。そして、浄土真宗での火葬、東北での土葬の二つが相馬中村藩では儀礼として行われるようになったのである。ここで、一忌組と火葬組について説明する。

真宗に限らず、不幸のことを一切世話する一忌組というのが大ていの部落に結ばれていて、穴掘り棺かつぎから、葬式の役割をきめること、料理の果てまですべて責任を以てこれに当る。組では極く大事なことは喪家とすることは勿論だが、他の細かなことすべて一存できめる。親戚といえども彼等にまかせきりで干渉しない習である。<sup>26</sup>

これが一忌組である。一忌組は土葬を主としてやっている者達の集まりであり、相馬中村藩では葬式の時に一

忌組の者が集まり世話をしたのである。これに対し、浄土真宗の門徒たちは火葬組を組織した。

火葬組は真宗の人だけで広い範囲に組織されていることがある。例えば一忌組は一五戸であってもその中に門徒が二戸しかない場合、火葬は出来ぬから、その二戸が他の門徒と一緒になって組織している火葬組に頼むというわけである。するとその人達が集まって火葬場をつくり、火葬のことだけを手伝う仕組みである。

おこう組ともいう。<sup>27</sup>

火葬組は一忌組と違い、全ての世話をするわけではなく、火葬のみの手伝いである。現在の火葬場とは違い、当時の火葬場は木と木を積みかさねた簡易的なものであった。元々あった一忌組に対し、火葬組を浄土真宗の門徒達は組織したため、また一段と溝が深まってしまっているのである。

相馬中村藩では神道系を信仰していた家が多く、家には神棚が殆ど設置されていたのである。移住した者は藩により家を与えられたが、その時は飢饉後に使われなくなった家などがあたえられたため、家には神棚などが最初から設置されていた。神棚が設置されていた家であるうと、真宗門徒はそれを拝むことはなかった。移住する際に持ってきた仏壇か、移住先にて新しく作った仏壇だけである。

しかし一方においては大神宮を拝まず、まして氏神もなく、部落の神祭にも参加しなかった。相馬人は彼等の強烈な信仰を思わずに、自分達の信じたい神仏を拜んでくれないことの方が目に立った。彼等は彼等で、他の事は譲っても信仰の問題は譲歩せず、働くことと寺参りの外はあたかも知らぬものの如く熱心であった。

元は神道系の家であったため、そこには神棚があるのは仕方がない。だが、それを無視して新しく仏壇を設置し、それにしか目がいかない移住者を見た移住先の人は、それを良く思えないのは仕方がないとも言える。しかし、浄土真宗を信仰しているから移民政策で呼ばれたともいえる。したがって、お互いに譲れない信仰心があつたため溝が出来てしまい、関係が悪化してしまったと考える。

儀礼、信仰の違いで溝が出来てしまったが、積極的に移住先に同化しようとする者もいた。同化する者に対し岩崎敏夫氏は次のように述べている。

同化の過程には自から段階があつて、だまつていてもすぐ同化するもの、同化させようと努力すれば割合早く同化するもの、また同化し難いものにも過程があつて、現在に及んでもなおお手がつけられずに残っているものもある。<sup>29</sup>

移住する者達も自分から嫌われようとする訳もなく、積極的に同化していった。故郷を捨てる覚悟で今の地に移住してきているため、戻ることが出来なかつたのである。故郷に戻るとして、もう一度関所を通らなければ戻ることが出来ないため、この選択はなかつたといえる。

禁教館

コヒ



## 結論

本卒論において、東北地方での浄土真宗がどのようなようになって広がったのかが分かった。元々東北地方には浄土真宗は少なく神道系や他の宗教が広まっていた。そこに飢饉での被害を回復するため、遠く離れた北陸から移民政策によって呼ばれたのである。何故北陸が選ばれたのか、それは北陸に住む人は熱心な浄土真宗の門徒であったからである。飢饉によって起きた被害は藩の財政難だけではなく、人口減少が最も深刻であった。冷害、長雨、洪水により田畑は荒廃し、作物が取れなくなり食料がなかった。それにより墮胎、間引きが起こり、人口減少に拍車がかかった。ここで有元正雄氏による有元説が重要である。有元説は浄土真宗の門徒は殺生忌避であり、勤勉であると主張している。当時の相馬中村藩の記録をみて分かるが、移民政策をとってからの相馬中村藩は人口が増加している。移民政策によって他藩からの移住での人口増加だけではなく、墮胎、間引きが行われなくなり、人口が増えたのである。これは有元説で言われている勤勉が関係してくる。移住先にて田畑をもらった移住者達は、荒廃していた田畑を耕し作物を作り藩の財政をも回復させたのだ。この殺生忌避、勤勉がこの二つが移民政策の中で一番重要な要因ともいえるのである。次に、この移民政策を実行した久米泰翁も忘れてはいけない。久米泰翁が移民政策を行わずにいたのなら、相馬中村藩は飢饉を乗り切ることは出来ず、その先に待っているのは藩の衰退である。

しかし、全てが上手くいっていただけではない。移住した際に信仰の問題が起きた。これは現在でも起きてくる問題だが、当時では重大な問題である。浄土真宗をずっと信仰していた者達は、浄土真宗が生活の中に入って

いたため、今更変えることは出来なかったのである。それによって移住先ではそれが問題になり差別の対象となった。だが、その彼等の心の支えになったのが浄土真宗の教えだったのである。仕事以外にやることはお寺参り、読経だけであり、他には何もなかった。悲しいことがあった時など、苦しい時はお経を読んでいたのである。彼等は全てのことにおいて信仰を優先に考えていた。それは信仰が生活と同化していると言っても間違いではなく、自身のことより優先されていた。本尊の例がまさにそれである。彼等の大半は本尊である阿弥陀如来を持ってきていた。大きさは異なるが、身の回りの物より優先されていたことがこれにより分かる。移住する際に持ってきた物を他にあげるのであれば、今回本論には入れることが出来なかった内容だが、彼等は柿の種を持ってきているのである。その柿の種を植え、育った柿の木を蓮如柿と呼び、移住してきた者たちの庭に多く見られる。蓮如柿が植えられている家の大半は移民政策によって移住してきた者達の家と判断することが、植物によっても出るのである。作物の育て方からも同じようなことがわかる。現在北陸地方で見られる農作業が福島県相馬郡でも少しであるが残っているのである。東北真宗移民についてこれから詳しく調べていくのであれば、より多くの資料、また多角的視点から調べる必要がある。

結論として、彼等の働きがあったため相馬中村藩は財政難を回復し、存続出来たのである。今の福島県での浄土真宗の展開も移民政策の結果によるものである。佐藤昌芳氏も述べていたが、ご先祖様達の苦勞なくて今は無いので、決して忘れてはいけないことである。

- (1) 高橋将人『図説相馬・双葉の歴史』一四三頁
- (2) 北萱浜史編纂委員会『北萱浜史』三一頁
- (3) 池端大二『加賀の走り移民』一八一頁
- (4) 池端大二『加賀の走り移民』一八一頁
- (5) 池端大二『加賀の走り移民』一八〇頁
- (6) 岩崎敏夫『本邦小祠の研究・民間信仰の民俗学的研究(復刻版)』四六六頁
- (7) 堀一郎『宗教・習俗の生活規制』二五一頁
- (8) 堀一郎『宗教・習俗の生活規制』二五一頁
- (9) 太田浩史『相馬移民と二宮尊徳』一二頁
- (10) 太田浩史『相馬移民と二宮尊徳』三五―三六頁
- (11) 太田浩史『相馬移民と二宮尊徳』三六頁
- (12) 太田浩史『相馬移民と二宮尊徳』七二―七三頁
- (13) 堀一郎『宗教・習俗の生活規制』二五三頁
- (14) 太田浩史『相馬移民と二宮尊徳』七三―七四頁
- (15) 竹内慎一郎『北陸農民の関東東北移民』一二頁

禁 廠

- (16) 岩崎敏夫『本邦小祠の研究・民間信仰の民俗学的研究(復刻版)』四六五―四六六頁
- (17) 太田浩史『恵信尼の道』三三頁
- (18) 相馬市史編纂会『相馬市史三 ―各論編二・民族・人物―』一〇七九頁
- (19) 池端大二『北の無名碑 加賀移民の足跡をたどる』二五頁
- (20) 竹内慎一郎『北陸農民の関東東北移民』一六頁
- (21) 千秋謙治『砺波散村地域研究所 研究紀要 第二六号』一三頁
- (22) 池端大二『加賀の走り移民』三三頁
- (23) 岩崎敏夫『本邦小祠の研究』五〇一―五〇二頁
- (24) 教学伝道研究センター『浄土真宗聖典(註釈版)』八三六頁
- (25) 堀一郎『宗教・習俗の生活規制』二五一頁
- (26) 岩崎敏夫『本邦小祠の研究』五〇三頁
- (27) 岩崎敏夫『本邦小祠の研究』五〇三頁
- (28) 岩崎敏夫『本邦小祠の研究』五〇二頁
- (29) 岩崎敏夫『本邦小祠の研究』五〇五頁

禁

コピ

参考文献

書籍

- 高橋将人 『図説相馬・双葉の歴史』 株式会社郷土出版社 二〇〇〇年
- 北萱浜史編纂委員会 『北萱浜史』 愛原印刷所 一九八七年
- 池端大二 『加賀の走り移民』 株式会社北国出版社 一九八四年
- 岩崎敏夫 『本邦小祠の研究―民間信仰の民俗学的研究―』 岩崎博士学位論文出版後援会 一九六三年
- 堀一郎 『宗教・習俗の生活規制』 株式会社未来社 一九六三年
- 太田浩史 『相馬移民と二宮尊徳』 ナカダ印刷 二〇一四年
- 竹内慎一郎 『北陸農民の関東東北移民』 入善町文化会 一九六二年
- 相馬市史編纂会 『相馬市史三―各論編二・民族・人物―』 福島県相馬市 一九七五年
- 相馬市 『衆臣家譜 卷十四 ―相馬市史資料集 特別編十四―』 相馬市 二〇一〇年
- 教学伝道研究センター 『浄土真宗聖典（註釈版）』 本願寺出版社 一九八八年
- 太田浩史 『恵信尼の道』 真宗大谷派日豊教区坊守会 二〇一三年

禁

識

論文

- 池端大二 『北の無名碑 ―加賀移民の足跡をたどる―』 株式会社北國新聞社 一九九五年
- 寺島文夫 『二宮尊徳 ―その生涯と思想―』 文理書院 一九五五年
- 南相馬市教育委員会生涯学習課 『二宮金次郎・富田高慶からの贈りもの』 南相馬 二〇〇八年

- 千秋謙治 「砺波農民の相馬中村藩への移民」『砺波散村地域研究所 研究紀要』 二六 二〇〇九年

- 岩本由輝 「念仏衆の流れを訪ねる ―相馬の浄土真宗考―」『みちのく念仏』 六四 二〇一一年
- 岩本由輝 「念仏衆の流れを訪ねる (二) ―相馬の浄土真宗考―」『みちのく念仏』 六五 二〇一二年

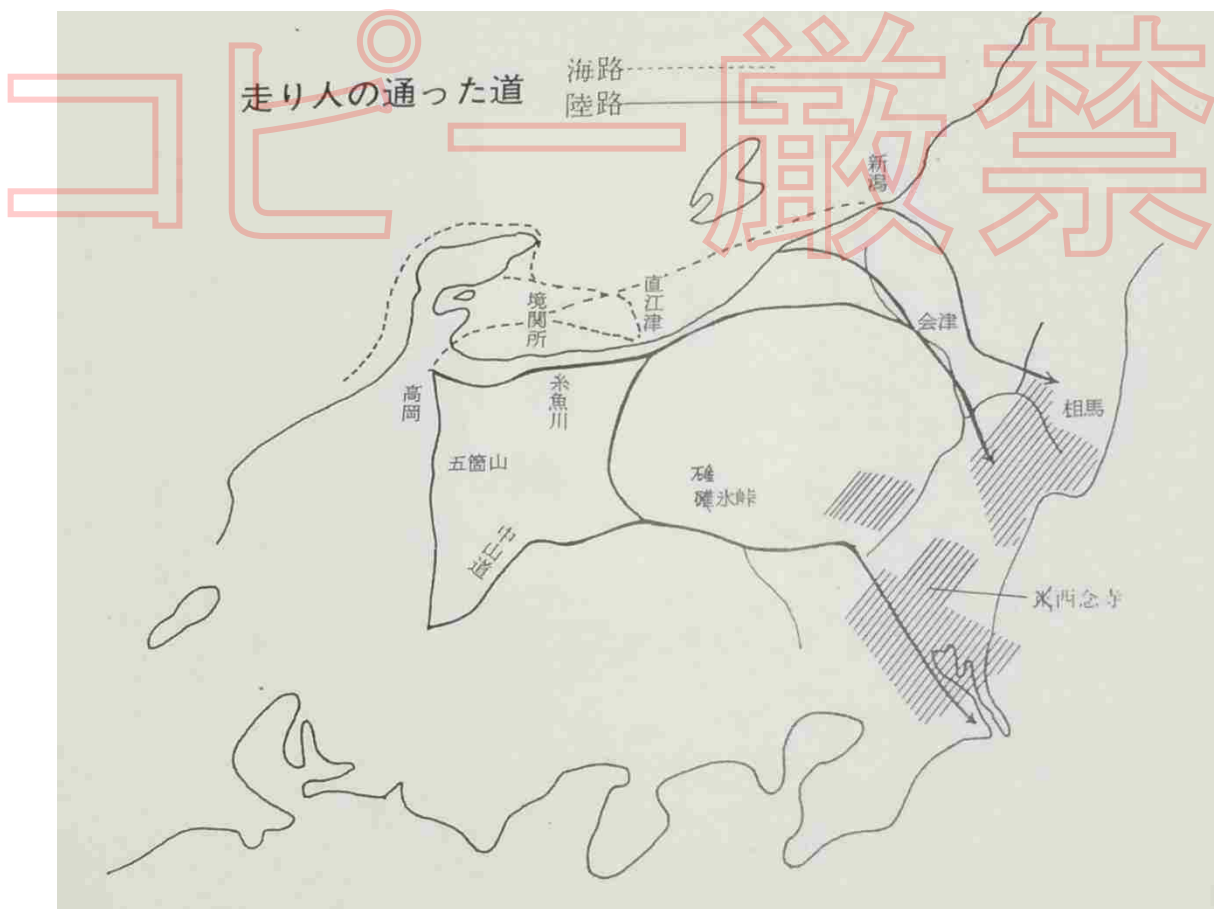
禁本 廠

コピ

参考史料

参考史料一

池端大二『加賀の走り移民』一八一頁



参考史料二

佐藤昌芳氏 提供 福島県南相馬市鹿島区烏崎字六平作七

佐藤昌芳氏宅にある阿弥陀如来の本尊である。北陸から東北へ移民する際に持ってきたと言われていた懐中本尊。高さ三十cm、幅が十cmである。





参考史料三

小田光氏 提供 福島県南相馬市鹿島区角川原字東原一四四

小田光氏宅にある阿弥陀如来の本尊である。北陸から東北へ移民する際に持ってきたと言われている懐中本尊。

高さ九cm、幅が四・五センチである。



コピー 厳禁

#### 参考史料四

佐藤昌芳氏 福島県南相馬市鹿島区烏崎字六平作七

私達の先祖は隠れて来たため最初はあまり物を持ってきていなかった、だからお寺に行って経を読む事、仏壇の前に座り経を読む事と畑を耕す事しかしていなかった。けど経を読むのは一日も忘れなかったらしい。辛い時などは特に読んだらしい。泣きながら読んでいて馬鹿にもされ、泣きながら読経している姿を加賀泣きとも言われている。だから私達のご先祖様の苦勞を決して忘れない、この地はご先祖様が頑張って耕した地だから絶対に離れられない。原発の事もあるけどこれだけは忘れてはいけない。最後に祖父達からよく言い聞かされていた言葉がある。その言葉は、念仏者は無碍の一道なり。という言葉である。私は内容はまで詳しく意味はしらないが、とても大事な言葉であつたらしい。

